

父

芥川龍之介

青空文庫

自分が中学の四年生だった時の話である。

その年の秋、日光から足尾あしおへかけて、三泊の修学旅行があった。「午前六時三十分上野停車場前集合、同五十分発車……」こう云う箇条が、学校から渡す膳写版とうしゃばんの刷物すりものに書いてある。

当日になると自分は、碌ろくに朝飯あさめしも食わずに家をとび出した。電車でゆけば停車場まで二十分とはかからない。——そう思いながらも、何となく心がせく。停車場の赤い柱の前に立って、電車を待っているうちも、気が気でない。

生憎あいにく、空は曇っている。方々の工場で鳴らす汽笛ねの音が、鼠ねずみ色の水蒸気をふるわせたら、それが皆霧きり雨さめになって、降って来はしないかとも思われる。その退屈あな空の下で、高架鉄道こうかを汽車が通る。被服廠ひふくしょうへ通う荷馬車ねまが通る。店の戸が一つずつ開く。自分のいる停車場にも、もう二三人、人が立った。それが皆、眠ねの足りなそうな顔を、陰気らしく片づけている。寒い。——そこへ割引わりひきの電車が来た。

こみ合っている中を、やっと吊皮つりかわにぶらさがると、誰か後うしろから、自分の肩をたたく者

がある。自分は慌あわててふり向いた。

「お早う。」

見ると、能勢のせいそお五十雄であった。やはり、自分のように、紺のヘルの制服を着て、外がい套とうを巻いて左の肩からかけて、麻のゲートルをはいて、腰に弁当つつまみの包やら水筒やらをぶらさげている。

能勢は、自分と同じ小学校を出て、同じ中学校へはいった男である。これと云って、得意な学科もなかったが、その代りに、これと云って、不得意なものもない。その癖、ちよとした事には、器用な性質たちで、流行はやりうた唄と云うようなものは、一度聞くと、すぐに節を覚えてしまう。そうして、修学旅行で宿屋へでも泊る晩なぞには、それを得意になって披ひ露ろうする。詩吟しぎん、薩摩琵琶さつまびわ、落語、講談、声色こわいろ、手品てじな、何でも出来た。その上また、身ぶりとか、顔つきとかで、人を笑わせるのに独特な妙を得ている。従つって級クラスの気うけも、教員間の評判も悪くはない。もつとも自分とは、互に往来ゆききはしていながら、さして親しいと云う間柄でもなかった。

「早いね、君も。」

「僕はいつも早いさ。」能勢はこう云いながら、ちよいと小鼻をうごめかした。

「でもこの間は遅刻したぜ。」

「この間？」

「国語の時間にさ。」

「ああ、馬場に叱しかられた時か。あいつは弘法こうぼうにも筆のあやまりさ。」能勢は、教員の名前をよびすてにする癖があつた。

「あの先生には、僕も叱しかられた。」

「遅刻で？」

「いいえ、本を忘れて。」

「仁丹じんたんは、いやにやかましいからな。」「仁丹」と云うのは、能勢が馬場教諭につけた渾名あだなである。——こんな話をしている中に、停車場前へ来た。

乗った時と同じように、こみあつている中をやつと電車から下りて停車場へはいると、時刻が早いので、まだ級の連中クラスは二三人しか集つていない。互に「お早う」の挨拶あいさつを交換する。先を争つて、待合室の木のベンチに、腰をかける。それから、いつものように、勢よく饒舌しゃべり出した。皆「僕」と云う代りに、「己おれ」と云うのを得意にする年輩ねんばいである。その自ら「己おれ」と称する連中の口から、旅行の予想、生徒同志の品隘ひんしつ、教員の悪評など

が盛んに出た。

「泉はちやくいぜ、あいつは教員用のチョイスを持っているもんだから、一度も下読みな
んぞした事はないんだとさ。」

「平野はもつとちやくいぜ。あいつは試験の時と云うと、歴史の年代をみな爪へ書いて行
くんだつて。」

「そう云えば先生だつてちやくいからな。」

「ちやくいとも。本間なんぞは receive の i と e と、どっちが先へ来るんだか、それさえ
碌に知らない癖に、教師用でいい加減にごま化しごま化し、教えているじゃあないか。」

どこまでも、ちやくいで持ちきるばかりで一つも、碌な噂は出ない。すると、その中に
能勢が、自分の隣のベンチに腰をかけて、新聞を読んでいた、職人らしい男の靴を、パツ
キンレイだと批評した。これは当時、マツキンレイと云う新形の靴が流行ったのに、この
男の靴は、一体に光沢を失つて、その上先の方がぱっくり口を開いていたからである。

「パツキンレイはよかつた。」こう云つて、皆一時に、失笑した。

それから、自分たちは、いい気になつて、この待合室に出入するいろいろな人間を
物色しはじめた。そうして一々、それに、東京の中学生でなければ云えないような、生意

気な悪口を加え出した。そう云う事にかけて、ひけをとるような、おとなしい生徒は、自分たちの中に一人もいない。中でも能勢の形容が、一番辛辣で、かつ一番諧謔に富んでいた。

「能勢、能勢、あのお上さんを見ろよ。」

「あいつは河豚が孕んだような顔をしているぜ。」

「こつちの赤帽も、何かに似ているぜ。ねえ能勢。」

「あいつはカロ口五世さ。」

しまいには、能勢が一人で、悪口を云う役目をひきうけるような事になった。

すると、その時、自分たちの一人は、時間表の前に立って、細かい数字をしらべている妙な男を発見した。その男は羊羹色の背広を着て、体操に使う球竿のような細い脚を、鼠の粗い縞のズボンに通している。縁の広い昔風の黒い中折れの下から、半白の毛がはみ出している所を見ると、もうかなりな年配らしい。その癩頸のまわりには、白と黒と格子縞の派手なハンケチをまきつけて、鞭かと思うような、寒竹の長い杖をちよいと脇の下へはさんでいる。服装と云い、態度と云い、すべてが、パンチの挿絵を切抜いて、そのままそれを、この停車場の人ごみの中へ、立たせたとしか思われない。——自分たちの

一人は、また新しく悪口の材料が出来たのをよろこぶように、肩でおかしそうに笑いながら、能勢の手をひっぱって、

「おい、あいつはどうだい。」とこう云った。

そこで、自分たちは、皆その妙な男を見た。男は少し反り身になりながら、チヨツキのポケットから、紫の打紐うちひものついた大きなニツケルの懐中時計を出して、丹念たんねんにそれと時間表の数字とを見くらべている。横顔だけ見て、自分はすぐに、それが能勢の父親だと云う事を知った。

しかし、そこにいた自分たちの連中には、一人もそれを知っている者がいない。だから皆、能勢の口から、この滑稽な人物を、適当に形容する語ことばを聞こうとして、聞いた後の笑いを用意しながら、面白そうに能勢の顔をながめていた。中学の四年生には、その時の能勢の心もちを推測する明めいがない。自分は危く「あれは能勢フアザアの父だぜ。」と云おうとした。するとその時、

「あいつかい。あいつはロンドンていじき乞食さ。」

こう云う能勢の声がした。皆が一時にふき出したのは、云うまでもない。中にはわざわざ反り身になって、懐中時計を出しながら、能勢の父親の姿スタイルを真似て見る者さえある。自

分は、思わず下を向いた。その時の能勢の顔を見るだけの勇気が、自分には欠けていたからである。

「そいつは適評だな。」

「見ろ。見ろ。あの帽子を。」

「日かげ町か。」

「日かげ町にだつてあるものか。」

「じゃあ博物館だ。」

皆がまた、面白そうに笑つた。

曇天の停車場は、日の暮のようにうす暗い。自分は、そのうす暗い中で、そつとそのロンドン乞食の方をすかして見た。

すると、いつの間にか、うす日がさし始めたと見えて、幅の狭い光の帯が高い天井の明り取りから、茫と斜めにさしている。能勢の父親は、丁度その光の帯の中にいた。——周囲では、すべての物が動いている。眼のとどく所でも、とどかない所でも動いている。そうしてまたその運動が、声とも音ともつかないものになつて、この大きな建物の中を霧のように蔽つている。しかし能勢の父親だけは動かない。この現代と縁のない洋服を着た、

この現代と縁のない老人は、めまぐるしく動く人間の洪水の中に、これもやはり現代を超越した、黒の中折をあみだにかぶって、紫の打紐のついた懐中時計を右の掌たなごころの上にのせながら、依然としてポンプの如く時間表の前に佇ちよりつ立しているのである……

あとで、それとなく聞くと、その頃大学の薬局に通っていた能勢の父親は、能勢が自分たちと一しよに修学旅行に行く所を、出勤の途すがら見ようと思つて、自分の子には知らせずに、わざわざ停車場へ来たのださうである。

能勢五十雄は、中学を卒業すると間もなく、肺結核はいけつかくに罹かかつて、物故ついでした。その追悼式しきを、中学の図書室で挙げた時、制帽をかぶった能勢の写真の前で悼辞とうじを読んだのは、自分である。「君、父母に孝に、」——自分はその悼辞の中に、こう云う句を入れた。

(大正五年三月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集¹」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年9月24日第1刷発行

1995（平成7）年10月5日第13刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j:utyama

校正：earthian

1998年11月11日公開

2004年3月10日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

父
芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>